

緩和医療学

担当指導医師

教授：木村 祐輔

講師：鴻巣 正史

助教：中村 聖華

学修方針（実習概要等）：

臨床実習で培った知識を基盤とし、がんをはじめとする生命を脅かす疾患に罹患した患者およびその家族が抱える全人的苦痛（身体的、心理的、社会的、スピリチュアル）を深く理解し、それに基づいた効果的な全人的ケアを提供するための医学的知識・技術・態度、さらには多職種連携の実際について修得することを目指す。

教育成果（アウトカム）：

生命を脅かす疾患に罹患した患者およびその家族との、対話を軸とする診療を通じて、全人的苦痛を理解し、多様な苦痛の緩和に向けた包括的対処法の実際を理解することによって到達する。

（ディプロマポリシー：1,2,3,4,5,6,7,8）

到達目標（SBOs）：

外来・病棟実習

- * 1. 患者の病歴を聴取し、その医療情報を説明できる。
- * 2. 理学所見と全身状態を把握し患者の状態を説明できる。
- * 3. がんの診断に必要な検査法とその所見を説明できる。
- * 4. がんの治療法と集学的治療の理念、目的、意義について説明できる。
- * 5. 緩和ケアについて、その理念、目的、意義について説明できる。
- * 6. 全人的苦痛を理解し、その評価方法と対応方法を説明できる。
- * 7. 患者および家族とのコミュニケーションの重要性を説明できる。
- * 8. がん性疼痛の病態生理、基本的治療の実際を説明できる。
- * 9. 緩和ケアに関わる多職種(医師、看護師、薬剤師、MSW、臨床心理士ほか)それぞれの役割について理解し、協働することの重要性を説明できる。

実習内容：

1. 緩和ケア病棟実習：指導教官の指導のもと、以下の実習を行う。

- (1) 患者入棟時の症状聴取、身体診察を行う。
- (2) 回診を行いカルテに主観的情報と客観的情報を記載し、指導教官と共に評価や治療計画を立案する。
- (3) 患者や家族への病状説明に同席し、病状の伝え方やコミュニケーションの実際を学習する。

- (4) 疼痛に対するオピオイド使用法を学習する。
- (5) 疼痛以外の身体的症状を緩和する対応方法・ケアの仕方を学習する。
- (6) 精神的苦痛への対応・ケアを学習する。
- (7) 社会的背景を踏まえた苦痛の有無を捉え、ケアへの繋ぎ方を学習する。
- (8) スピリチュアルな苦痛の存在を理解し、いかなるケアができるかを学習する。
- (9) 家族の苦痛を捉え、家族ケアを学習する。
- (10) 多職種連携のタイミングとその実践方法を学習する。
- (11) 地域連携を要する患者・家族の意向や状況を理解し、連携方法の実際を学習する。

2. 緩和ケアチーム実習:チームメンバーと共に回診に同行し、以下の実習を行う。

- (1) 介入患者の回診に同行し、患者とのコミュニケーションの実際を見学し学習する。
- (2) 診療科との連携や入院病棟スタッフとの情報共有の実際を見学し学習する。
- (3) 新規介入患者における全人的苦痛や問題点の抽出をチームメンバーと共に実践の中で学習する。
- (4) 多職種カンファレンスに参加し、介入患者に対する多職種連携の実際を学習する。

3. 緩和ケア外来実習:指導教官の外来診察に同行し、以下の実習を行う。

- (1) 新規紹介患者の診察を見学し、緩和ケア外来に紹介される患者・家族の状態や意向がどこにあるのかを理解する。

4. 実習スケジュール

8:30	病棟カンファレンス(申し送り)
9:00	緩和ケアチームカンファレンス
9:15	緩和ケアチーム回診(一般病棟)
10:00	病棟回診・新規入棟患者診察 / 外来診察
12:00	昼食
13:45	病棟カンファレンス
14:30	カルテ記載 / 指導教官による講義
16:00	病棟回診(夕回診)

●緩和ケアチーム多職種カンファレンス

毎週火曜日 16:00~17:00 10階 カンファレンス 10-L

注意:

Webclass に実践内容のポートフォリオを入力すること。内容を教員が評価し、随時フィードバックする。

授業に使用する機械・器具と使用目的

使用区分	使用機器・器具等の名称	個数	使用目的
視聴覚用機械	液晶ディスプレイ	1台	講義・症例検討
視聴覚用機械	ノートパソコン	2台	講義・症例検討
実習用機器	折りたたみ回診車	1台	病棟回診時の処置